

第16回名古屋大学博物館企画展記録 「愛知の野鳥—環境と多様性—」

Records of 16th NUM Special Display
“Birds in Aichi – Environment and Diversity –”

佐藤紳司 (SATO Shinji)¹⁾・蛭薙観順 (HIRUNAGI Kanjun)²⁾

- 1) 名古屋大学理学部
School of Science, Nagoya University, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601, Japan
2) 名古屋大学博物館
The Nagoya University Museum, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601, Japan

会場：名古屋大学博物館

会期：2008年12月2日～2009年1月31日

展示内容

ごあいさつ

生物多様性条約会議 COP10 の名古屋での開催がきまり、「生物多様性」という言葉を耳にする機会が多くなりました。しかし「生物多様性」の概念はなかなか難しく、「多様性の確保のためにどんな事をすれば良いか」を分かり易く解説する場が求められています。この企画展では愛知県に生息する野鳥に焦点を当て、野鳥の多様性と生息環境との繋がりを具体的に解説しています。

生物と自然環境との繋がりを理解し、川や道路、公園や緑地の作り方、生活や仕事の形を工夫する事で、身の回りに多様な生き物が戻り、より心豊かな暮らしを楽しむことができるようになるでしょう。皆様もこの企画展を機会に生き物の多様性を実感していただきたいと思えます。この企画展の野鳥の生態写真や骨格標本などは、今年で創立70年を迎えた日本野鳥の会愛知県支部のメンバーの提供によります。支部は毎週日曜日に、どなたでも参加できる野鳥観察会（探鳥会）を行っております。

今回の企画展をきっかけに、こうした観察会にも参加され、生き物たちの暮らしぶりを実際に眺めてみる事も生物多様性を考える一歩になるでしょう。



2008年12月2日
名古屋大学博物館
日本野鳥の会愛知県支部

愛知の野鳥 —環境と多様性—

野鳥には翼があり、どこへでも自由に飛んで行けるのですが、良く観察してみると、種類ごとに特定の環境から離れないで生活している事が分かります。それぞれの種類は自然界の中で特定の環境を受け持ち、そこからはみ出さず忠実に自分の役割を果たしているからです。この自然界の約束を「棲み分け」と呼んでいます。「棲み分け」はとても強固なルールで、もし1つ種が受け持っていた自然環境が破壊されると、その種は生活スタイルを変えて生き延びることはできず、必ず絶滅してしまいます。つまり自然環境の多様性が「棲み分け」を維持し、生物種の多様性を作っていると言い換えても良いのです。

この企画展では、愛知県で見られる野鳥たちを「棲み分け」という観点から紹介しています。自然環境は驚くほど細かく其々の種のために割り振られており、体の大きさ、首や足の長さ、くちばしの形などにも深い必然性があります。写真や骨格標本、解説を手がかりに「棲み分け」という自然界の約束を考えてみましょう。この約束を実感することが、「生物多様性」を考える大切な一歩になるはずです。

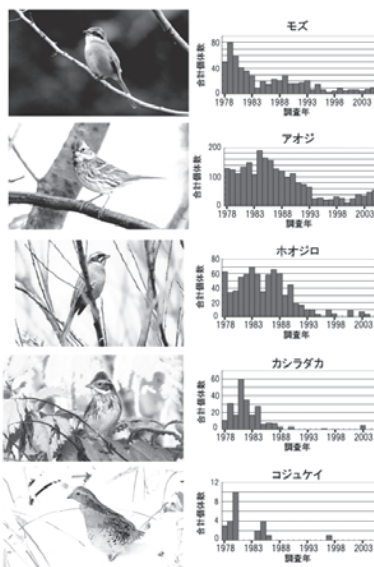
名古屋市内の森 —若い落葉広葉樹の森—

名古屋の東部には僅かの自然林が残っています。森は大人になるまで最低1000年かかりますが、一番状態の良い森でもまだ70年程度しか経っていない子供の段階にあります。落葉するドングリであるコナラとアベマキが主体で、状態の良い森には次世代を担うアラカシやシラカシなどの常緑のド

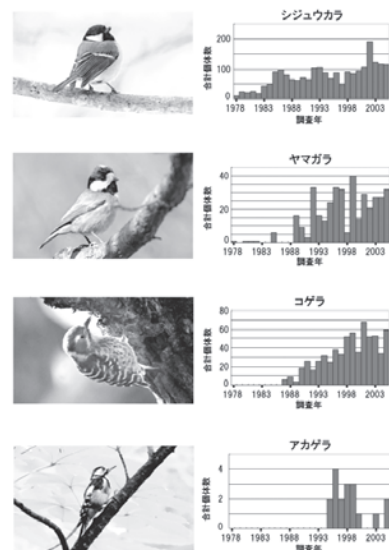
名古屋大学キャンパスにおける野鳥数の変化

名古屋大学生物研究会による30年間の生息調査より

草原、下生、地面を使う鳥達は
道路舗装や建物増加のため減少



木の上を使う鳥達は
樹木の成長と共に増加



草原や地面近くを使う鳥たちの著しい減少は、名古屋市内全体の傾向です。

一方で木々は成長を続け、樹上を使う鳥たちは増えています。里山では成長した木を切るべきという議論がありますが、不用意な伐採はせっかく回復しつつある森の鳥たちの多様性を阻害します。

野鳥の多様性回復の為には、草原や水辺環境の復元がもっとも望まれます。

ングリが増えつつあります。森の地面には落ち葉の蓄積が少なく、倒木なども僅かです。

ヒヨドリ、キジバト、シジュウカラなど日当たりの良い若い森を生息環境とする野鳥が多く、厚い落ち葉の地面や倒木を必要とする種、トラツグミ、ミソサザイ、ヤマシギ、アカゲラなどは希少となっています。草原や水辺環境の喪失も著しく、クイナ類やヨタカ、コジュケイなどは殆ど見られなくなりました。

名古屋都市部の森は、山間部の森で繁殖する夏鳥たちの渡りの回廊としても大変重要であり、毎年必ずオオルリやキビタキ、ホトトギスなど多くの種が名古屋の森を通って行きます。

名古屋都市部における生物多様性を確保するためには、水田や若い森の伐採維持（いわゆる里山管理）だけでは不十分であり、年齢を重ねた自然林の保存復元、自然の草原や水辺の復元がとても重要になります。

名古屋大学キャンパスにおける野鳥生息環境の推移

森の成長に伴って、樹上を生活環境とする鳥が増えています。

地面や水面を生息環境とする鳥は、環境悪化と共に減少しています。

このコーナーで展示した野鳥の解説

シメ 全長 18 cm 冬

他の小鳥が食べることのできない、比較的大きく硬い種子を採食する。比較の日当たりの良い樹木の上部で見られることが多い。撮影 服部憲一郎

近縁のカワラヒワ（通年見られる）は、より小型（全長 14.5 cm）の為、小さくて硬い木の実や種子を中心に採食する。カワラヒワの方が利用できる自然環境が広く、シメよりも生息数が多い。

メジロ 全長 11.5 cm 通年

樹上を生息空間とし、やわらかい果実や花蜜、昆虫を採食する。常緑樹や花木の多い、暖かい地方の植生を得意とする。冬期はシジュウカラやエナガと共に群れで行動することが多いが、1つの樹上の空間の中で互いに違うものを採食するため、競合が起こらない。撮影 服部憲一郎

ヒヨドリ 全長 27.5 cm 通年

日当たりの良い公園、庭、街路樹、人の手の入った明るい森に多く生息し、大きめの昆虫や果実を採食する。名古屋市内では、木はあるが大きな森に成長していない場所に最も多くみられる野鳥。

撮影 三浦 皓

シジュウカラ 全長 14.5 cm 通年

樹上を生息環境とし、昆虫や種子、小さな果実などを探して食べる。愛知県より寒い地方の森に多い。撮影 佐藤紳司

ヤマガラ 全長 14 cm 通年

樹上を生息環境とし、昆虫や種子などを採食する。シジュウカラよりも暖かい地方の植生を得意とし、西日本に多い。愛知県では、シジュウカラの方が個体数が多い。撮影 古澤穎一

生活空間、餌などが類似するシジュウカラは、より寒い地方の植生を得意とする。名古屋では、公園や若い森に進出して個体数を増やしている。ヤマガラは常緑広葉樹の多い比較的古い森を好む。

エナガ 全長 13.5 cm 通年

体が小さいことを生かして、落葉広葉樹などの細い枝先で、小さな昆虫を探して食べる。古い大木の森よりも、若い森に多く見られる傾向がある。撮影 村田時彦

ウグイス 全長 15 cm 夏は山地、冬は平地

山地の笹や低木で繁殖し、冬は平地の藪に潜む。明るく目に付く場所には、ほとんど現れない。主に昆虫を採食する。撮影 桑島カヤ子

スズメ 全長 14.5 cm 通年

他の種が使わない民家周辺という環境に生息する。地上付近で採食する。秋には子供達が大きな群れを作る。撮影 塩谷勝巳

ツグミ 全長 24 cm 冬

畑、水田、川原などの開けた場所に生息する。地面を歩いてミミズや昆虫を捕らえる事が多いが、木の実や果実なども食べる。撮影 武居 栄

近縁種のシロハラ（冬鳥）は、落ち葉の積もった森の地面に生息し、歩きながらミミズや昆虫を捕らえる。ツグミが好む明るく開けた場所には出てこない。落ち葉を清掃したり下生えを刈り取った明るい森には生活できない。

キジバト 全長 33 cm 通年

元来は森に生息するハトだったが、近年は公園や街路樹を主な生息地としている。実の成る樹木が多く、舗装面では地面に落ちた餌を探しやすいこと、ヘビなどの外敵が少ないことが公園や街路樹の利点とみられる。撮影 塩谷勝巳

ミヤマホオジロ 全長 15.5 cm 冬

森の周辺の低木や草原を生息空間とする。地面付近で種子などを採食する。愛知県よりも西で多く生息する。撮影 林 正直

近縁種のカシラダカ（冬鳥）は愛知県より東に多く、ミヤマホオジロより寒冷な植生を得意とする。愛知県では両種共に見られるが、林縁の自然植生の減少に伴い、その数は減少している。

ルリビタキ 全長 14 cm 冬

森の周辺の地面付近を生息空間とし、昆虫や小さな果実を採食する。行動圏は森の外縁部に限られ、森の内部や開けた場所に現れることはない。冬季も縄張りを作り、常に一定の場所を巡回する。

撮影 武居 栄

近縁のジョウビタキは、ルリビタキより明るい環境を生活空間とする。低木がまばらに生える空間や畑、庭などに見られる。

山間部の森—里山林からシイの極相林へ

名古屋市の周辺部には、瀬戸市の海上の森や豊田市の豊田市自然観察の森のように広い面積の里山林がつながっています。この中には、小河川、湿地、ため池などもあり谷地形を好むオオルリが繁殖

し、林内にはキビタキのさえずりが響き渡ります。杉林や極相林であるツブラジイなどが生育している少し暗いところではサンコウチョウが、「月、日、星 ホイホイホイ」と鳴き、子育てをしています。かつての里山管理が、放棄され枯れ木も多くなった林内では、キツツキの仲間のアオゲラが巣作りをし、冬季にはアカゲラが山から降りてきます。小鳥類の豊かな森では、それらを餌とするオオタカも見られます。

全国的に減少し、国の絶滅危惧Ⅱ類になったサシバは、山間の水田がまだ残っているところで、かろうじて繁殖しています。こうした里山も人の手が行き届かなくなり、シイ・カシ類の常緑広葉樹の森へと入りつつあります。

また、標高が高くなってくるとミズナラやブナなどの林が出てきます。県鳥であるコノハズクは、こうした深い森に生息しますが、現在ではほとんど見るができなくなりました。

山間部を流れる河川には、ヤマセミやカワガラスが1年を通して見られ、冬季にはオシドリなども飛来します。

様々な環境があることで、色々な種類の野鳥が生息できます。多様な環境が多様な鳥類を育むのです。

サシバのすめる森づくり

豊田市自然観察の森



サシバ (撮影: 福井強志)

サシバは、水田を含む里山環境に生息する渡りをするカラスほどの大きさのタカの仲間です。近年は、その数が減少し国や愛知県の絶滅危惧Ⅱ類に選定されています。

豊田市自然観察の森では、指定管理者である財団法人日本野鳥の会が中心となって豊田市と共に、かつて営巣していたサシバを再度呼び戻そうと「サシバのすめる森づくり」事業を2004年から始めています。

サシバの生息や生態調査を行うと共に、餌であるカエル類を増やすために、冬季の休耕田などに水を張り、ニホンアカガエルなどの産卵数を増やす、環境管理を行っています。

サシバは、カエル、ヘビ、昆虫などを主食とし豊かな里山環境の生態系の頂点に立つ猛禽類です。里山の生物多様性が保全されていないと生息できない野鳥なのです。



ニホンアカガエル産卵数変化



ボランティアによる
かつてサシバが繁殖していた谷での草刈



冬水休耕田

このコーナーで展示した野鳥の解説

キビタキ 全長 13.5 cm 夏

森の上部を飛んでいる虫を捕食する。比較的大きな広葉樹のある広い森で繁殖する。現在の名古屋市

内の森では、木々の年齢が若く繁殖には不十分。初夏に市内に残ろうとする個体があるので、このまま森の木々が大きくなれば、将来的に名古屋市内で繁殖が成功する可能性がある。撮影 高木清和

オオルリ 全長 16.5 cm 夏鳥

溪流に沿った森に生息し、チョウや蛾、水生昆虫の成虫など、飛んでいる昆虫を空中で捕食する。川や池の周囲に生息範囲を限定することで、近縁のキビタキなどと棲み分けている。撮影 服部憲一郎

サンコウチョウ 雄 44.5 cm 雌 17.5 cm 夏

標高の低い山地の暗い森に生息し、森の中を飛ぶ昆虫を捕食する。雄は体よりも長い尾を持つ。スギの植林地に見られることもある。撮影 村田時彦

コサメビタキ 全長 13 cm 夏

標高の低い山地の明るい森に生息し、空中を飛ぶ小さな虫を捕食する。春と秋には比較的たくさんの個体が名古屋市内の森を通過していく。撮影 三浦 皓

ミソサザイ 全長 10.5 cm 通年

倒木の多い古い森を好む。苔むした地面で昆虫を探して食べる。撮影 藤井幹夫

アカゲラ 全長 23.5 cm 通年

主に枯れた木の幹を掘り、昆虫を食べる。枯死した木や倒木の多い古い森が必要。年齢の若い木々ばかり森や林床に倒木の少ない森には生息できない。名古屋市内にはアカゲラが通年過ごすことのできる森は育っていない。撮影 矢田かずこ

アオゲラ 全長 29 cm 通年

様々な森に生息するが、広くて古い常緑広葉樹林に多い。木の幹の虫を探だけでなく、地面に降りてアリやクモ、ムカデなどの昆虫を捕食することが多い。また、小枝にとまり、果実などを食べる。近縁のアカゲラが使わない、より広い自然環境で、より広範囲の餌を食べることで棲み分けを行っている。撮影 塩谷勝巳

ヤマドリ 雄 125 cm 雌 55 cm 通年

山地の森の地面を生息環境とし、種子や芽、昆虫、クモ類などを採食する。撮影 塩谷勝巳
近縁のキジは、山地の森ではなく平地の草原を生息環境とする。植物の種子や芽、昆虫、クモ類などヤマドリと類似の食性を持つが、餌の豊富な平地の草原を使うため、生息密度、個体数はヤマドリより格段に多い。

コノハズク 全長 19-22 cm 夏

山地の大きな森林に棲み、夜間に昆虫を捕食する。状態の良い大きな森の減少と共に、コノハズクの生息数は減少している。撮影 服部憲一郎

近縁のアオバズクは、平地の森に棲み夜間に虫を捕食する。樹洞に営巣するため、古い大木を好むが、若い森で人工物の隙間に営巣する個体もある。十分な量の虫が捕食できるまとまった面積の自然

環境が必要。

オオタカ 全長 50-57 cm 通年

大きな森林に生息し、ヒヨドリ、キジバト、ツグミなどのやや大型の小鳥を捕食する。森の中や周囲を飛ぶ鳥を空中で捕らえるのに適した比較的短い小回りの効く翼を持つ。近年、都市部のドバトを餌とする個体が少しずつ現れており、名古屋市内でも冬季に見られるようになってきた。繁殖にはまとまった規模の森が必要であり、名古屋市内での繁殖成功例はまだ少ない。撮影 犬飼博行

オシドリ 全長 45 cm 主に冬

他のカモ類と異なり木の枝にとまることが多い。夏は森の中の川や池で繁殖し、冬には低地に降りる個体もある。周辺に樹木の多い淡水の水辺で越冬する。植物食が中心で、特にドングリ類を好む。撮影 矢田かずこ

ヤマセミ 全長 37.5 cm 通年

山間部の川や池で、イワナ、ヤマメ、ウグイ、フナなど比較的大きな魚（5-20 cm）を捕らえて食べる。撮影 矢田かずこ

近縁のカワセミは、より小さな体（全長 17 cm）を持つため、平地の浅く静かな水辺で、より小さな魚（3-7 cm）を捕食する。ヤマセミの方が体が大きいため、より深い水や、より早い流れで採食が可能。一方、カワセミはより小さな魚を捕食する為、自然界での生息可能な環境が広く、愛知県でもヤマセミよりずっと多くの個体数が生息している。

水田と河川

名古屋の周辺には、比較的広い面積の水田地帯が広がっており、こうした地域には、本来、草原や湿原、浅い淡水を本来のすみかとする野鳥が見られます。現在の愛知県では自然の草原や湿原がほとんど残されていないため、こうした場所に生息するはずの野鳥たちが、その代替環境として水田や周囲の水路を利用しています。したがって、その生息密度や生息種の多様性は本来の環境より低くなっています。

草原をすみかとするケリやタゲリ、キジなどは、比較的多く見られますが、浅い水面や広い葦原を必要とするクイナ、ヒクイナ、ヨシゴイなどは大幅に減少しています。全国でコウノトリが一旦絶滅したのも、浅い淡水の自然環境が悪化した為です。川の両岸と底面を固める三面護岸が、こうした種類の鳥たちに最も大きな影響を与えています。

里山ブームに乗った水田作りではなく、本来の湿原、浅い淡水池や護岸工事の無い川の復元が、生物多様性を確保する大変重要な鍵になっています。

このコーナーで展示した野鳥の解説

タゲリ 全長 31.5 cm 冬

草原、川原、水田の地面を歩き、昆虫や種子などを食べる。生息環境の類似するケリとは、生息場所を分けることで共存している。愛知県ではケリが多く、タゲリは比較的少ない。撮影 犬飼博行

ササゴイ 全長 57.5 cm 夏

川や池、水田で魚や小動物を捕食する。木の葉や羽などを疑似餌として水面に落とし、狩をすることもある。暗くなってからの方が活発であるが、昼間も活動する。撮影 桑島不二夫
近縁種のゴイサギ（通年見られる）は夜行性で、水辺で魚や昆虫を食べる。採食行動や体つきのわずかな違いにより、ゴイサギの利用する自然環境はササゴイより広く、個体数はゴイサギの方が圧倒的に多い。

カルガモ 全長 60.5 cm 通年

愛知県の平地で広く繁殖する唯一のカモ。淡水の池や河川、干潟など広い範囲に生息する。

撮影 古澤穎一

ハクセキレイ 全長 21 cm 通年

水辺の草の少ない地面を歩き、昆虫を捕らえて食べる。頻繁に尾を上下させる行動が特徴的。地面の中の虫ではなく地面に止まった虫を採食するので、餌を見つけやすいアスファルトの路面や駐車場に生息範囲を拡大している。巣は建物の隙間に作る。植物生育の少ない水辺の地面を利用する鳥だが、採食や営巣行動の様式が幸いして都市化の中で分布域を拡大している。撮影 古澤穎一

姿形が類似するセグロセキレイ（通年）は、かつては名古屋市内に普通に見られたが、都市化に伴うハクセキレイの進入により、現在では、ハクセキレイの利用しない、自然度の高い川原などに限り生息している。

セッカ 全長 12.5 cm 夏

イネ科の草の多い草原や水田のあぜなどに生息し、昆虫を食べる。撮影 犬飼博行

ムナグロ 全長 24 cm 春と秋

愛知県では、春と秋に見られる。主に淡水の湿地や水田、畑などで昆虫、甲殻類、ミミズなどを食べる。高緯度地方のツンドラで繁殖し、冬は沖縄以南で越冬する。撮影 武居 栄

姿形の類似するダイゼン（旅鳥一部冬鳥）は、淡水の湿地ではなく干潟でゴカイや甲殻類を食べる。ムナグロと同じ時期に愛知県を通過するが、棲み分けがなされているため1つの場所でムナグロとダイゼンを同時に見ることは稀。一部は藤前干潟などで越冬する。

コチドリ 全長 16 cm 夏

淡水の水辺の砂礫地や砂地に生息。地面を走って昆虫などを捕らえる。砂礫地、砂地に巣を作る。生息環境が急速に減少しつつある。撮影 三浦 皓

近縁種のシロチドリは、海岸に近い砂地や干潟に生息し、海岸から離れた淡水の水辺に入ることは無い。

ケリ 全長 35.5 cm 通年

草原、川原、水田の地面を歩き、昆虫や種子などを食べる。3月には、地面に枯れ草などで巣を作り繁殖を始める。中部や近畿地方では普通に見られるが、他の地域では分布は局地的。撮影 林 正直
近縁種のタゲリ（冬鳥）はケリとほとんど同じ自然環境を使用するため、生息域を分け合うことで両種が共存している。愛知県ではケリが多いが、全国的にはタゲリの方が多い。

タシギ 全長 27 cm 冬

淡水の湿地、川岸等に生息。主に夜行性で、長くちばしを土の中に刺してミミズや昆虫を食べる。
撮影 塩谷勝巳

タマシギ 全長 23.5 cm 通年

主に西日本の淡水の湿地、水田などに生息する。多くの鳥と異なりメスの方が色彩豊か。オスが子育てを行う。繁殖に適した湿地が少ないため、その生息数は限られている。撮影 藤井幹夫

コミミズク 全長 35-41 cm 冬

川岸、畑、水田など、木の少ない見通しの良い地面に生息する。夕方から活動し、ネズミを捕らえる。ほとんど木の無い環境を使うことで、他のフクロウ類と棲み分けている。撮影 藤井幹夫

モズ 全長 20 cm 通年

木の点在する草原、川原、畑、水田などに生息する。昆虫、ミミズ、小鳥、小型両生類、小型爬虫類など様々な種を対象に狩を行う。冬季には木の実も食べる。山地や北方で繁殖した個体の多くは、秋に平地に移動する。撮影 丹羽国泰

干潟と後背地

愛知県には「藤前干潟」323ha、「汐川干潟」280ha という2つの大きな干潟があります。共に日本

水辺の裸地の復元を目指して 廃材から造るコアジサシの営巣地(2008年度)

愛知県立阿久比高等学校 理科部 藤井舞子(2年)、畑中勇也(1年)、藤井真理子(教諭)
滝中学 理科部 小崎拓登(3年) 愛知県支部調査研究部 金澤 智、村上 修

コアジサシとは



コアジサシ(絶滅危惧種)は、海岸や河原、埋め立て地などの裸地を利用して集団で営巣します。夏の終わり子育てが終わると若鳥とともに再びオーストラリアなどの南半球に戻っていきます。

愛知県のコアジサシ

愛知県は、長い海岸線と多くの干拓地があり、全国有数のコアジサシの飛来地です。美浜町河和は県下でも最大級の営巣地で、2000羽以上の営巣を確認した。しかしこの場所もショッピングモール開発の為、来年の営巣が確認できないかもしれません。



愛知県下のコアジサシ営巣地
稲永50羽前後 木曾岬1500羽
大府日本高圧電気ビル屋上100羽前後
大同特殊鋼(株)人工営巣地
美浜河和 2000羽 (2008年度)

失われつつある水辺の裸地

コアジサシは、海浜や川沿いの開けた裸地を利用して営巣を行います。しかし開発によりコアジサシが好む営巣に適した水辺の裸地が減少しています。このままコアジサシの営巣地が確保できない状態が続けば、近い将来コアジサシは絶滅する事になるかもしれません。

新たな営巣地作り ＝水辺の裸地を廃材からつくる環境実験



大同特殊鋼(株)の協力で知多工場において営巣地作りを進めています。鉄精錬過程で出るスラグを使い、コアジサシが求める環境ができるのかどうか挑戦中です。この他紙粘土でデコイを作り、人工営巣地に設置したり、コアジサシの鳴き声を流すなど営巣地へのコアジサシ誘致を試みています。

興味のある方は愛知県支部 調査研究部までご連絡下さい。

を代表する規模の水鳥たちの住処となっており、毎年、越冬や渡りで訪れる1—2万羽の野鳥の生活を支えています。オーストラリア、東南アジアからシベリア、アラスカを結ぶ大きな渡り鳥の移動経路の中間地点に位置し、世界的に見ても大変重要な干潟となっています。

数百羽のハマシギの群れが一斉に向きを変える群飛、数千羽のカワウが行う追い込み漁など、ダイナミックな鳥たちの営みが見られます。また、上空から魚を捕らえるミサゴ、水鳥を狙うハヤブサなど、他では稀な大型のワシ類を観察することもできます。この2つの干潟で1年間に観察される鳥の種は、水鳥を中心に150種以上になります。

この多様な種は干潟という1つの環境の中でも、それぞれ別の餌を食べることで、あるいは別の捕らえ方をすることで、お互いに争うことなく上手に共存しています。

世界に誇れる愛知県の干潟は、その重要性が認識され保全が進んでいます。現在とても深刻なのは、干潟周辺の砂礫地や草原の減少です。たとえばコアジサシという小型の魚を食べる鳥は、草の少ない砂や石ころの地面に巣を作りますが、このコアジサシが巣作りをする場所がとても少なくなり、種の存続の危機を迎えています。

このコーナーで展示した野鳥の解説

ハマシギ 全長 21 cm 春と秋、一部冬

干潟を歩き回って、ゴカイ、ヨコエビ、水生昆虫などを食べる。足やくちばしが短いため、深い水には入らずに常に水際で採食する。春と秋には数千—1万羽が干潟に渡来し、越冬する個体も多い。

撮影 佐藤紳司

コアジサシ 全長 28 cm 夏

干潟、河口などの浅い海に生息。上空からダイビングし、水中の魚を捕食する。川の中州や干潟周辺の砂礫地や砂地に直接卵を産み繁殖する。コアジサシが繁殖に必要とする砂礫地、砂地が失われつつあるため、その個体数は急速に減少している。愛知県は日本におけるコアジサシの主要な繁殖地となっている。撮影 森泉正人

カワウ 全長 82 cm 通年

淡水の川や池でも見られるが、干潟や河口に多い。水中に潜り、くちばしで魚を捕らえる。庄内川などでは、数百羽の集団での追い込み漁を行う。愛知県（伊勢湾）は日本におけるカワウの主要な生息地となっている。撮影 桑島不二夫

ミサゴ 全長 54-64 cm 通年

干潟などの魚の多い浅い水辺に生息。上空からダイビングをして、比較的大型の魚を捕食する。

撮影 矢田かずこ

アオサギ 全長 93 cm 通年

淡水の水辺にも見られるが、比較的大型の魚が多い海岸や干潟を主要な生息地とする。長い首を素早く伸ばして泳いでいる魚を採食する。撮影 武居 栄

近縁のコサギ（全長 61 cm）はアオサギより小型の為、より水深の浅い淡水の池や河川、水田など広範囲の環境を利用する。ドジョウ、フナ、オイカワなどお小型の魚や、ザリガニ、カエルなどを採食する。待ち伏せを主体とするアオサギと異なり、足で水底の泥をかき混ぜ、餌を追い出す採食方法をとる。

ユリカモメ 全長 40 cm 冬

干潟や海岸に多いが、内陸の淡水域にも現れる。主に水辺の昆虫や死んだ魚などを食べる。水に潜って餌を採ることはできない。撮影 高木清和

メダイチドリ 全長 19.5 cm 春と秋

干潟を素早く走り、泥の表面に出ているゴカイなどを採食する。夏はカムチャツカ半島などで繁殖し、冬は東南アジアなどで過ごす。愛知県では、春と秋に定期的に干潟を訪れる旅鳥。

撮影 佐藤紳司

チュウシャクシギ 全長 42 cm 春と秋

大きな干潟で主にカニを採食する。下に曲がった大きなくちばしで泥の中に潜むカニを取り出し、足を取った後に丸呑みにする。ロシア北極圏のツンドラで繁殖し、冬はオーストラリアなどで過ごす。愛知県には渡りの途中、春と秋に定期的に渡来する。撮影 服部憲一郎

オオソリハシシギ 全長 41 cm 春と秋

長く上に反ったくちばしを干潟の泥に差込み、ゴカイなどを採食する。ロシアの北極海沿岸で繁殖し、冬は東南アジア、オーストラリアで過ごす。愛知県には、この大移動の途中、春と秋に定期的に渡来する。撮影 佐藤紳司



展示の実際（部分）



見学風景

野鳥の頭骨とくちばしの多様性

野鳥は多様な自然環境の中で1つの種が1つのきまった環境を使うという「棲み分け」を行っています。この自然界のルールが、頭骨やくちばしを独特な形へと進化させました。

ウグイス

低い茂みの中で、小さな虫を食べます。小さな虫をつまみ易い細く尖ったくちばしを持っています。

キジバト

主に、やや大きめの木の実や種子などを食べます。地上に落ちている餌を食べる事が多いのですが、落ちる前の実を樹上で食べることもあります。くちばしの先や少し下に湾曲し実をつまみ易い形になっています。

シメ

硬い実を割って食べる小鳥です。そのため、頭の大きさに比べて非常に大きく太いくちばしを持っています。

オオタカ

捕獲した獲物の羽をむしり、体を引き裂くことができるよう、大変鋭いくちばしを持っています。目は大きく両眼で物を見ることができる構造になっています。

アオバズク

夜に狩をする為、大変大きな目が前方に向かって付いています。くちばしの形はオオタカに類似しています。

ミミズを食べるヤマシギとトラツグミの比較

ヤマシギ（上）

森の小さな流れのそばなど、地面のやわらかい場所に暮らし、地中深くにくちばしを差し込んでミミズを食べます。視覚ではなく、くちばしの感覚で餌を探すため、目は頭の後ろ、独特の位置にあります。

トラツグミ（下）

森の落ち葉の下に潜むミミズや虫を食べます。先の尖った、比較的短いくちばしを持っています。

ミミズを探すには、ヤマシギの方が強力な武器を持っている様に思えますが、実際には小さめのくちばしで落葉の下の虫を探す方が有利らしく、自然界では、トラツグミの個体数がヤマシギよりもずっと多くなっています。

アオサギ

浅い水面に首を曲げて立ち、足元にやってくる魚を捕らえます。一瞬のスピードで魚を捕らえる為、長く鋭いくちばしを持っています。

カワウ

水に潜って、泳いでいる魚を捕らえます。先が鉤状に湾曲したくちばしは、アオサギの様なスピード重視でなく、水中で魚を逃さない捕捉性に優れた形状になっています。

キンクロハジロ

水の底に潜り、泥の中の小さな貝や甲殻類を食べます。泥をすくい易い幅広のくちばしを持っています。

チュウシャクシギ

長く下に湾曲したくちばしを使い、潮の引いた干潟で、穴の中の蟹を引きずり出して食べます。



「野鳥の頭骨とくちばしの多様性」の展示

ハンズオン コーナー

野鳥のホネとヨク



野鳥缶バッジを作ろう



野鳥の声を聴いてみよう

バードボイスペンで…
サウンドリーダーで…

企画展関連企画

○特別講演会

第16回企画展「愛知の野鳥 環境と多様性」に関連して、2回の特別講演会を博物館講義室で開催しました。

2008年12月20日の講演会では、高木清和さん（日本野鳥の会 愛知県支部長）の「野鳥を観察す



特別講演会（2008年12月20日）



特別講演会（2009年1月10日）

る楽しさ」に70名が参加しました。高木さんは少年時代からの大の野鳥好きで、鏡ヶ池に入って水鳥を捕まえようとした等のエピソードも交えて、身近な野鳥の楽しみ方を紹介しました。野鳥の鳴き声、羽の色、飛び方、歩き方のいろいろなど観察にもとづく貴重な内容でした。野鳥の観察のポイントの一つが、「静かに野鳥が近づいてくるのを待つ」ということです。講演では高木さん自身が撮影した野鳥の生態写真が多数紹介され、参加者を魅了しました。

2009年1月10日の講演会では、金沢 智さん（日本野鳥の会 愛知県支部、名古屋市立大学 大学院医学研究科）の「江戸時代 尾張の生物多様性」に74名の参加がありました。金沢さんが名古屋市蓬左文庫所蔵の「張州雑誌」に興味をもつきっかけはサンフランシスコでの生物調査で太平洋をはさんで、愛知と同じような動物種がいるという点でした。「張州雑誌」は江戸時代、今から230年ほど前に書かれた100冊の愛知の博物誌です。そこには熱田沖のニホンアシカの生態がリアルに描かれていることが紹介されました。このような絵解きから、瀬戸にはニホンオオカミ、カワウソ、知多半島ではアホウドリなどが生息していたことが解説され、江戸時代のこの地方の豊かな生態系に参加者の関心をよびました。環境と生物多様性を考える場合、こういった時間軸を頭にいれて見ることの大切さが紹介されました。

○キャンパス探鳥会—名大東山キャンパスの探鳥コースを案内—

2008年12月6日実施

46名の参加者があり、日本野鳥の会の愛知支部のメンバーの方々の案内でキャンパスの探鳥ルートを巡りました。今回の探鳥会ではキャンパス内で野鳥がどのように棲み分けているかを、実際の場所の説明を聴きながら観察しました。野外観察園の林では、ヒヨドリ、メジロを観察し、キャンパスの西端の林ではコゲラの生態を10分近く観察しました。鏡ヶ池では、アオサギ、コサギ、キンクロハジロ、カイツブリの親子を、また一部の方はジョウビタキも観察しました。豊田講堂の北の林内ではアオジの生息も確認し、コースの後半のハイライトは、本部裏でのシジュウカラ、ヤマガラ、ヒガ



キャンパス探鳥会

ラ、メジロ、コゲラの混群との出会でした。種が異なる野鳥の集団ですが、それぞれが探す餌が異なるので、一緒に行動しているようです。参加者はこのようにキャンパス内の野鳥の棲み分けを実際に観察し、自然界の仕組みに理解を深めました。

○野鳥写真に挑戦—鏡ヶ池野鳥撮影会—

2008年12月13日実施

一般から応募があった14名が参加しました。この企画ではフィールドスコープ（望遠鏡）にコンパクトもしくは一眼レフデジタルカメラを接続した「デジスコ」を用いました。光学器材は興和株式会社の協力をえました。参加者はまずデジスコの機材の説明の後で、それぞれ持参のカメラを持ち、鏡ヶ池に向かいました。池の淵に器材を備え付けて、池に飛来しているコサギ、ゴイサギ等の観察と写真撮影を行いました。これらの水鳥は同じ場所に長くとどまる習性があり、動きがすくないので、デジスコ撮影の格好の被写体となります。ほとんどの参加者はデジスコによる超望遠観察や撮影を初めて体験しました。このような機会をとおして、さらに野鳥への関心が深まったという感想もありました。撮影後に博物館にもどり、撮影した作品をスクリーンに投影し簡単な評価や、野鳥写真の撮り方のコツなどの解説がありました。



野鳥撮影会

○トリのミクロの不思議—トリの羽やホネを電子顕微鏡でみてみよう—

2009年1月24日実施

応募による参加者 12名（小学生2名、中学生1名、社会人9名）

企画は3部構成で実施しました。参加者はまず博物館講義室で、「トリの骨からみえるもの」と題して、骨を観察する楽しみや、トリが飛ぶために備えた骨の仕組み、トリの祖先等について解説を受けました。引き続き、ニワトリ、ヒクイドリ、アオサギ等などの実物の骨格標本を使って、トリの

翼や後肢の骨や頸椎の特徴の説明をうけて、各自が手にとり観察しました。最後の実習では、展示場に設置された卓上走査型電子顕微鏡（TM-1000、日立ハイテクノロジーズ）を使い、野鳥の羽の微細構造を観察しました。羽の小羽枝にあるフック構造、騒音を抑えるため新幹線のパンタグラフに応用されたフクロウの翼の初列風切前縁のギザギザ構造や青緑色の金属光沢を持つマガモの翼鏡の板状に変化した小羽枝の電子顕微鏡像を観察し、参加者は自然が造り出す造形の面白さを体感した様子でした。実習終了後のアンケートでは、全員が「実習は楽しかった」という感想を寄せました。



トリのミクロの不思議

(2009年10月28日受付)